別紙様式

成果（○）と課題（●）

校番（２）　【広南中学校】

１　「本質的な問い」による単元構想について

○　本単元の「本質的な問い」に対して，生徒は主体的に取り組み，考えを深めることができた。単元の学習に入る前に，本やインターネットを用いて作品について調べさせたことも，一人一人が興味・関心をもって授業に臨めた要因の一つだと考える。「私たちが古典作品を学ぶ意義とは何か」という「本質的な問い」に対し，「今と昔の文化や考え方，生き方の違いを知り，古文に描かれている情景から，日本の良さや和文化の美しさなどの奥深さを味わうこと」「昔の時代の人々の考え方，捉え方，価値観などを学び，より表現の幅を広げ，物事における新たな考え方をもつことができること」等と挙げており，「さらに他の作品を読んでみたい」という読書活動にもつなげられた。

２　単元で育成を目指す資質・能力について

	知識・技能（「音読する等，興味を持って学習を進められたか」）		思考・判断・表現（単元学習後に行った記述テストの評価）		
	肯定的評価	否定的評価	A	B	C
学習前	47.0%	53.0%	29.5%	47.0%	23.5%
学習後	86.7%	13.3%	47.0%	41.1%	11.7%

【知識・技能】

○　「古典作品を音読することは好きか」「作品に描かれているものの見方や考え方に，興味を持ちながら学習を進められたか」等，古典作品の学習に入る前に行った，古典の学習に関する意識アンケートでは，全体的な肯定的評価が概ね８割に達していた一方で，古文の音読については５割弱であった。しかし，授業後のアンケートでは肯定的評価が 85%を越え，中でも「とてもあてはまる」と答えた生徒は５%から 73%へと大きく伸びた。「声に出して読むことで，七五調や擬態語などのリズムを楽しめた」など，作品が持つ独特なリズムを感じることにとどまらず，「今とは違った昔の表現の仕方を知ったり生活の様子を想像したりして，自分なりに解釈しながら作品を楽しむことができた」と挙げており，作品の特徴を生かして朗読することを通して，多くの生徒が古典の世界に親しみをもてたと考えられる。

私は，直実の行動に共感できる。
「あはれ，助けたてまつらばや。」「よも逃れさせたまはじ」「熊谷あまりにいとほしくて」という叙述から，熊谷が敦盛の首を取ることに抵抗があると感じられる。当時は，敵に情けをかけるのは武士として恥であった。首を取ったあとに直実は「武芸の家に生まれずは…」と言っており，自分の息子ほどの敦盛の首を取ることに抵抗があった直実だが，武士としての自覚があったからこそ，首をとったのだと考えた。

【Ａ評価の生徒の記述内容】

【思考・判断・表現】

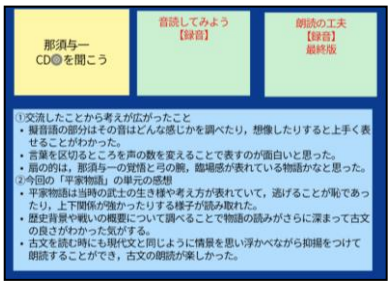
○　最終的なゴールに「朗読劇」を設定したことで「人物の心情をもっと重ねて朗読したい」という振り返りが多く見られた。音読ではなく朗読するというゴール設定が，「人物の心情を深く読み取りたい」という意欲につながり，複数の叙述を引用して内容を解釈することに繋がったと考える。

【単元テスト】

●　三角ロジックを用いて考えを整理する手法は習得しつつある。ただし，叙述を引用することができても，内容の解釈が深まらない生徒もいる。今回は古典作品ということで苦手意識が強いこともあったが，今後も三角ロジックを活用し，解釈の部分が深まる演習を繰り返す必要がある。

【主体的に学習に取り組む態度】

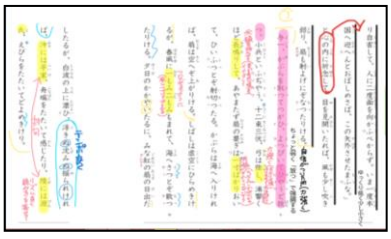
○　ロイロノートに範読音声を送り，生徒がいつでも聞いて練習できるように準備した。「音読」から「朗読」へと変化させる過程で，人物の心情や時代背景などをもっと知りたいという欲求が生まれ，インターネットや本を利用して調べた生徒が複数名いた。右のように，学習の初めと終わりを比較できるようなシートを用いたことで，自身の音読が上達していることを味わわせることができ，肯定的評価の増加につながった。



【８時間目「朗読発表会」後の生徒の振り返り】

３　「デジタル機器」の活用

○　叙述を根拠として自分の考えを説明する際に，ロイロノートの共有ノート機能を活用した。テキストを貼り付け，根拠となる叙述に線を引いたり，自分の解釈や考えを書き込ませたりすることにより，交流の時間を有効活用できた。グループ交流だけでなく，全体発表の際も画面を共有することで，視覚支援にもつながり，理解を深めるのに有効であったと考える。



【共有ノートを活用したテキスト】